茅ヶ崎と大岡家

平山孝通(*1)

はじめに

大正初年と昭和 5 年に作製された 2 種類の「絵葉書」で大岡家と浄見寺を振り返りましょう。例年 4 月に開催される「大岡越前祭」を考えるのに必要な絵葉書です。

「大岡越前守絵葉書　相模浄見寺」（図 1）は、大正初年に作成されたもので、大岡祭(現大岡越前祭)の由来ともなった大正元（1912）年 11 月 19 日、大岡忠相に「徳川治世の明吏(優れた官僚)」として、「従四位」が贈られたときに発行されたと思われます。江戸時代に建立されたとおぼしき瓦葺きの山門と茅葺きの本堂と庫裏、大岡家累代の墓、陣屋跡から南を望む風景、贈位を契機に堤の石井文四郎より寺へ寄贈された忠相真筆と伝わる掛軸の 5 点です。

「相模国茅ヶ崎在　大岡家菩提所浄見寺復興記念　昭和五年(1930)十月十九日　廟宇復興会」(図 2）は、大正 12 年 9 月 1 日に勃発した関東大震災からの復興を記念して発行されたものです。再建された本堂、忠相の墓、復興記念碑、陣屋跡から西の富士山を望む風景、新に表装がなされた忠相の掛軸と寺の縁起の 6 点です。

これらの絵葉書で、江戸時代後期から昭和初期にかけての大岡家の墓所や浄見寺の佇まいを感じることができます。この 2 種類の絵葉書を見つつ、大岡家関連の資料を読み進めてみましょう。なお、絵葉書の詳細については、平山孝通・坂井源一「「絵葉書」にみる大岡越前守と菩提所浄見寺」（『文化資料館調査研究報告』27)を参照してください。

（1）　大岡家とは

『大名武鑑』（図 3）で大岡家を検討してみましょう。

『武鑑』とは大名や旗本の名鑑で、本国・家系・家紋・江戸屋敷の所在・江戸城における控之間・家督相続の年月・官位・官職名・諱・室・旗印・嫡男・中老・用人・御城夫・添役・暑中及寒中の献上品・火消の纏・菩提所・石高・在所などが記載されています。

本国は三河国(三州)、現在の愛知県です。家系図の冒頭には「左大臣藤原教実の後胤(子孫)」とありますので、鎌足を先祖とする藤原の一族です。『大名武鑑』のほかの版には、「大職冠鎌足公廿一代九条摂政関白教実の後胤」ともみえます。

藤原から九条(京の九条に屋敷を構えた)に姓を改め、のちに九条一族の庄園がある三河国幡豆郡吉良西荘(現西尾市)に移り、その子孫が、同国八名郡宇利(現豊橋市)へ、さらに同国碧海郡大岡(現安城市)に土着して大岡を姓としました。

初代忠勝は初め助右衛門助勝と名乗っていました。松平広忠(徳川家康の父)に仕えて武勲を上げて、諱（実名)の一字である「忠」を拝領し(一字拝領、偏諱という。主君の偏諱を賜ることは名誉なことで、頂いた文字を名前の上に付ける)、忠右衛門忠勝と改めました。号は浄見、浄見寺の寺名の由来になりました。それ以来、大岡家の当主は諱に忠の一字を用いることが多く、通称も忠右衛門と名乗りました。

2 代忠政の兄である忠祐と忠次は「於三州(三河国)討死、於尾州(尾張国)石ヶ瀬討死」とあります。「尾州石ヶ瀬」の戦いは、永禄元年(1558)から 4 年にかけて織田信長対今川義元、そして織田と連合する水野信元対今川勢の松平元康(のちの徳川家康)が石ヶ瀬川を挟んで衝突しました。しかし、永禄 3 年の桶狭間の戦いで今川義元が敗れると織田・水野は松平と和睦しましたが、桶狭間の戦いが行われた前後に忠次は石ヶ瀬において討ち死にしてしまいました。

3 代忠世の兄である忠俊と忠行も同じく「於城州(山城国)伏見討死、於摂州(摂津国)大坂討死」とあり、山城国伏見の戦いと摂津国大坂の陣で討死にしています。

忠俊が討ち死にした「山城国伏見(城)の戦い」は、慶長5年(1600)7月から8月にかけて行われました。9月15日の「関ヶ原の戦い」の前哨戦の一つと考えられる戦いです。また、忠行が討ち死にした慶長20年（1615）の大坂の陣は豊臣と徳川の大軍で、その大坂城が落城した最期の激戦の正に5月7日に忠行は討ち死にしてしまいました。

これらの記述から初代から3代の頃は戦乱の時代、戦国時代の末期ということがわかります。

家紋は、剣輪違(本紋)と把稲の下瑞垣(替紋)の二種類で、浄見寺の寺宝の一つである忠相が使用したと伝わる膳具の正面右には剣輪違、左には把稲の下瑞垣が記されています。この『大名武鑑』の発行された時代の当主は10代大岡紀伊守忠愛です。上屋敷は外桜田に、江戸城の大手門より12丁ほどのところに位置しています。江戸城に登城した大名が将軍に拝謁するときの控え室である詰所(格や石高に応じて定められる)は、菊が描かれた菊之間(3万石未満の譜代大名の控之間)です。文政11年子年(1828)の11月に家督を相続しています。官位は朝散大夫、これは、隋や唐の名称で「従五位下」のことです。国持大名以外の一般大名や、遠国奉行、町奉行、勘定奉行などの要職にある旗本の官位です。御内室は忍藩主松平下総守忠堯の妹ですが、その実名は記されていません。御定府とは参勤交代をせずに、江戸に定住し、江戸城に詰める譜代大名です。老中、寺社奉行などの要職にあって江戸城に詰める藩主は江戸に定住する必要がありますので、定府となります。旗指物が図示されています。下段には中老、用人、御城夫、添役の氏名がみえます。御嫡は空欄ですが、世継ぎはまだ幼少なのでしょうか。献上品は、暑中は干鰺、寒中は塩鮎です。纏は大名火消です。それは江戸幕府の課役の一つで江戸城への延焼を防ぐために組織されたもので、纏印は本紋の剣輪違です。纏は火事場における大岡家の活躍を示すものです。菩提所は2ヵ寺あり、浄土宗相州(相模国)堤村の浄見寺と禅宗(曹洞宗)三田聖坂の功運寺で、浄見寺には殿方が、功運寺には奥方が眠っていましたが、後に浄見寺に合葬されています。一万石の大名です。在所は三州額田郡西大平村で、そこに陣屋を構えていました。江戸より76里ほどの遠方にあります。

以上、『大名武鑑』で10代当主忠愛を中心とする大岡家の諸々を理解することができました。

なお、現在大岡家では当主名の読み方は種々あって定かではないという理由で、10代忠愛は「ちゅうあいさん」と、また、初代忠勝は一般的に「ただかつ」と読むことが多いようですが、「ただとう」と呼ぶこともあるようです。

(2)　大岡家における相模国高座郡堤村とは

なぜ、三河国出身の旗本である大岡家が相模国高座郡堤村に関わりを持つことになったのでしょうか。天保12年(1842)に成立した相模国の地誌である『新編相模国風土記稿』（図4）にヒントを探りましょう。

「巻之六十一　村落部　高座郡巻之三」の「堤村(豆々三牟良)」の項に次のようにあります。

○……今(天保12年、1842年です)、地頭(知行地の領主、頭のことです)は大岡伝蔵で、先祖の2代忠右衛門忠政が、天正19年(1591)5月3日に徳川家康から堤村を賜りました。

○浄見寺の説明は次のようです。窓月山と号し、浄土宗の寺で、慶長16年(1611)に地頭3代大岡忠右衛門忠世(2代忠政の3男)が、父と兄の菩提を弔うために建てました。堤村の北に隣接する芹沢村の芹沢山来迎寺五世深誉を開山としました。深誉は三州(三河国)出身の人です。三州に対する思い入れが感じられます。寺号と山号は祖父1代忠勝の法名の文字を用いた大岡一族の菩提所です。

△1代大岡忠右衛門忠勝の墓の説明は次のようです。忠勝の法名は、「大綱院忠誉窓月浄見居士」で、初め三州某地に葬られましたが、元和元年(1615)7月、浄見寺に改葬されました。寛永年間

(1624~43)にまとめられた大岡の家譜には、「忠勝は、はじめ助右衛門助勝と名乗っていました。松平清康(家康の祖父)と広忠(同父)に仕えて、三州吉田の城攻で城将牧野伝治を討取るという武勲を上げました。この褒賞として下坂派の長身の鑓と広忠の諱の一字を賜り、忠右衛門忠勝と改名しました。その後、某年「三河国」で 73 歳で死す」とあります。

旧小出村芹沢生まれの郷土史家・樋田豊宏氏の労作『小出誌』には、忠勝の「三州吉田の城攻め」での武勲の顚末が記されていますので、引用してみましょう。

「……牧野伝治は、三河国渥美郡の吉田城を兄と共に守っていた。享禄 2 年(1529)5 月、松平清康(家康の祖父)が城の近くに火を放つのを見て、千余の兵を率いて城を出で、吉田川を渡りその堤に陣を布いた。はじめ牧野の兵は鋭く(機敏に戦い)、松平の兵は潰走(敗走)したが、清康は敵の勝ちに乗じたところに新手を替えて戦い、三河国の伊奈城主らと奮戦した。そのとき、忠勝は城将・牧野伝治と戦い、討ち取ったのである」とあります。

清康の咄嗟の判断で形勢が大逆転し、浮き足立った牧野軍に一撃を加えたのです。激しい戦闘の一こまを垣間見るような気がしてきます。この褒賞として下坂派の長身の鑓と広忠(家康の父)より諱の一字を賜ったのです。主君を助け、大岡の名を多いに高めた一戦といえます。この 1 代忠勝の奮戦なくして堤村の大岡家はなかったといえるのです。しかし、残念なことに息子の忠祐はこの軍で討ち死にしてしまいました。

○大岡氏陣屋蹟の説明には、「浄見寺の東南にあり、2 代忠右衛門忠政当村を賜った後、ここに土着し、後江戸に移住す」とあります。

以上をまとめると、『新編相模国風土記稿』には、2 代忠政が天正 19 年(1591)5 月 3 日に家康から堤村を賜り、陣屋を構えて住み着いたこと、浄見寺は慶長 16 年(1611)に 3 代忠世が、父と兄の菩提を弔うために建立した大岡家の菩提所で、寺号は 1 代忠勝の法名に由来すること、その後、明暦 3 年(1657)の江戸大火以降における江戸の整備に伴い 3 代忠世か 4 代忠真の時代の 17 世紀中頃には堤村から江戸の旗本屋敷に移住したと思われること、などがわかります。

(3)　大岡家と浄見寺

さて、(2)では、浄見寺（図 6）の由来について『新編相模国風土記稿』を引用しましたが、異なる記述の資料もありますので整理をしてみましょう。

①『寛政重修諸家譜』（寛政年間(1789～1801)に江戸幕府が編修した大名や旗本の家譜。文化 9 年（1812）に完成)の 2 代大岡忠政の項には、「某年死す。年 80。または寛永 6 年(1629)2 月 28 日死す。年 82。法名浄西。采地(知行地)堤村の浄見寺に葬る。これ忠政かつて 1 代父忠勝が法名を用いて寺号として、開基せる所なり。以下代々葬地とす」とあります。2 代忠政が開基し、1 代父忠勝の法名を寺号とし、代々の葬地としたことがわかります。

②再度引用しますが、『新編相模国風土記稿』(天保 12 年(1842)成立した相模国の地誌)の「堤村」の項には、「〇浄見寺　窓月山と号す、浄土宗 鎌倉郡岩瀬村大長寺末 慶長 16 年(1611)地頭大岡忠右衛門 3 代忠世 2 代忠政の三男なり、法号源忠院徳誉法運(雲)、寛永 17 年(1640)12 月 28 日死す、父兄追福の為に起立し、芹沢村来迎寺五世深誉を招て開山とす 深誉は三州人、明暦 2 年(1656)6 月 19 日寂す 寺山号は 1 代祖父忠勝が法名の文字なり、今大岡氏一統の菩提所たり……、△1 代大岡忠右衛門忠勝墓 碑面に大綱院忠誉窓月浄見居士、文禄 3 年(1594)6 月 12 日と鐫る、忠勝初三州某地に葬り、元和元年(1615)7 月此処に改葬すと云ふ……某年三河国にて 73 歳にして死すと見ゆ、………」とあります。

詳しい説明がなされています。浄土宗、鎌倉郡の岩瀬村大長寺の末寺であること、慶長16年(1611)に3代忠世が2代父忠政と兄忠行らの追福(追善供養)のために、芹沢の来迎寺五世深誉を招て開山としたこと、寺号は1代祖父忠勝の法名に由来すること、その祖父を三河より元和元年(1615)7月に此処(浄見寺)に改葬したことなどが記されています。

③『皇国地誌村誌（こうこくちしそんし）』(明治12年(1879)2月13日編成)の「堤村」の項には、「浄見寺……寛永年間(1624~43)僧深誉開基シ本村ノ地頭大岡佐渡守(諱は忠種、3代忠世が長男、忠世の兄忠行が養子、義父忠行は慶長20年(1615)5月7日大坂の陣にて討ち死に、忠種は同年5歳で遺跡を継ぐ、佐渡守の叙任は寛文10年(1670)12月28日)及ヒ実父大岡忠右衛門　諱忠世法諡（ほうし）源忠院殿徳誉法運　之ヲ創建シ父祖　諱忠勝法諡大綱院殿窓月浄見　ノ法諡ヲ襲(世襲)テ　窓月山源忠院浄見寺　ト号ス」とあります。

僧深誉が開基し、大岡佐渡守忠種とその3代実父忠世が創建し、1代先祖忠勝の法諡から山号と寺号を受け継ぎ、忠世の法諡を院号としたことがわかります。忠世の法諡が使われていることから、忠世の死後、忠種によって浄見寺の完成がみられたのでしょう。

④『国誌下調』(明治19年(1886)編纂)の「堤村」の項、浄見寺の「開基年月」には、「慶長16年(1611)月不詳」。「雑」には、「……慶長16年大岡忠四郎忠行追福ノ為創建シ、芹沢村来迎寺五世僧深誉開山トス、1代祖父忠勝ノ法諡大綱院殿窓月(以下欠損)」とあります。

慶長16年の時点では、忠行はまだ健在なので追福には違和感がありますが、「祖父忠勝」の表現から、浄見寺は3代忠世が兄忠行のために創建したことがわかります。

以上の資料から、浄見寺の創建は2代忠政が堤村を賜った頃から自らを「開基」として、資金面で尽力して寺の建物をつくり、寺号は1代父忠勝の法名である「浄見」を用いました。しかし、本格的には3代忠世が僧深誉を招いて「開山」として、慶長16(1611)に建立したと思われます。それは大岡の本家である兄・忠行家に養子に出した長男・大岡佐渡守忠種および本家の行く末を案じていたからかもしれません。

慶長20年(1615)5月7日に忠行が討ち死し、養子の忠種を喪主とする何らの弔いが行われたことでしょう。その後、元和元年（1615）7月（7月13日改元）には三河の某地に葬られていた1代忠勝を浄見寺に改葬しています。忠行と忠勝の一連の法要を営んだ喪主は5歳の忠種と思われますが、大岡本家を中心とする一族の絆を深める一連の法要の後ろ盾として実際に仕切ったのは3代実父忠世だったと考えられます。それは兄忠行より知行地の一部を分与してもらったことに対する感謝でもあったのでしょう。

浄見寺は、本家を継いだ忠種が、実父忠世の法諡の源忠院を院号にして「窓月山源忠院浄見寺」として名実ともに完成させたのです。

なお、引用資料に、「法名」、「法号」、「法諡」とみられますが、生前の名である俗名に対するものと考えました。宗派によって表記に違いがみられるようです。

(4)　大岡越前守藤原忠相とは

次は、大岡越前守藤原忠相（図5）の事蹟を考えてみましょう。

(1)では、大岡は藤原の一族であると説明しました。よって、正式に名乗るときは、出自をあらわす藤原を称し、読みは「ふじわらのただすけ」と「の」を入れます。

『大名武鑑』（図3）の系図と「大岡家略系図」（図7）をみてください。4代忠真、5代忠相、6代忠宜と続きます。忠相には注記が付けられています。「実は同姓(大岡)美濃守忠高(忠高

の曾祖父は2代忠政、祖父は3代忠世の弟）三男」、「女子　養子忠相室」と記されています。忠相は忠真の養子です。忠真の息子・主馬は「貞享3年(1686)8月23日父に先立ち」ました。そこで同年12月10日に10歳の忠相を迎え、娘をその室(妻)としたのです。忠相は高座郡高田村(茅ヶ崎市高田)の地頭、大岡美濃守忠高の3男(または4男)で、同姓の大岡一族に養子に迎えられました。しかし、忠相とその妻(4代忠真の娘)との間の子どもは早世してしまいましたので、その後、忠相は市川氏より娶り、6代忠宜が生まれました。

忠相の幕府の官僚としての人となりをみてみましょう。

8代将軍徳川吉宗が推し進めた享保の改革を支えた町奉行の一人として知られています。病貧民のために小石川養生所を設置、火事の多い江戸に町火消を創設し、冤罪を防ぐための拷問の制限を定め、飢饉対策としての甘藷栽培の奨励など、真摯に改革に取り組んだ人物といえます。

日頃から「下情に通じざれば裁きは曲がる」(『甲子夜話』)といって、庶民の生活や実態を把握することに努めていたと、伝えられています。

また、「松が枝の直ぐなる心保ちたし柳の糸のなべて世の中」（訳：松のように揺らぐことがない真っ直ぐな心を保ち続けたいものだ。世の中の人々は柳の枝のように流されてしまうけれども）という歌も残しています。正しい道をどこまでも貫こうとしたのでしょう。

浄見寺の寺宝として伝わる掛軸「所宝惟賢」は、「宝とする所は、惟賢しき人」と読みます。「宝とする所は人の賢さだ、人材だ」という意味でしょう。四書五経の一書である「書経」や「日本書紀」の継体天皇7年(513)12月8日の詔にもみられる言葉です。忠相はそれらの書物を日頃から繙いていたのでしょうか。

落語の大岡裁きの一つ「三方一両損」では、裁きののちに大岡越前守が慰労の膳を用意し、食べ過ぎを注意したときのオチに「多くは(大岡)食はねえ、たった一膳(越前)」とあります。庶民の大岡人気は根強いものがあり、令和の今日でもＢＳ番組で「大岡越前」が放映され続けています。

忠相が20年間務めた町奉行は、未だ法律がおおまかだった時代なので「奉行としての才智がいる役」(『旧事諮問録』)といわれていました。その後の15年間、亡くなる1カ月前まで職にあった寺社奉行は「器量や才能がある人でなくては其の役に堪えられない」(「明良帯録」前篇)ともいわれていました。

両奉行ともに才能がある人でなければ務まらない職であると、当時幕府に関わりを持つ人々も忠相を高く評価していたのです。町奉行から大名に昇進したのは大岡忠相ただ一人だけです。

越前守はたまたま叙任された官職でした。正徳2年(1712)正月、36歳で山田奉行に就任し、3月に従五位下能登守に叙任されました。その後、享保2年(1717)2月3日、41歳で町奉行に就任し、その日に越前守に改めました。なぜなのでしょうか。理由は明白です。先輩の町奉行のなかに同じ官職名である坪内能登守がいました。同じ奉行所に同じ官職名の人物が存在すると不都合が起こる場合がありますので、あとから就任した奉行は官職名を変更するのが通例なのです。よって、町奉行として最も名高い大岡越前守が誕生したのです。もし官職名の重複がなければ「大岡越前祭」もドラマのタイトルも違うものになっていたことでしょう。「大岡越前守」、「大岡能登守」どちらの響きがいいでしょうか。

でもなぜ、「越前」にしたのでしょうか。寛永の家譜によると大岡家の初代忠右衛門忠勝は家康の祖父や父に歴任して武勲を上げその褒賞として下坂派の長身の鎗と広忠より諱の一字を賜り、改名したとあります。刀工の下坂派は近江の西坂本下坂を発祥として各地に移住しましたが、江戸の初

期には越前でも活躍し、その後家康に召し抱えられています。忠相は官職名を変更する段になって、先祖伝来の大岡家の誉れともいうべき鐺を手にして、遠く越前に思いを馳せたのかもしれません(これはこうあって欲しいと願う、筆者の全く根拠のない夢想です)。

宝暦元年(1751)11月2日、15年間務めた寺社奉行を病によって辞しましたが、奏者番は「もとの如くと仰せられ」てとどまりました。そして12月19日(墓石や「窓月山浄見寺縁起」（図2-7）には16日とみえます)に、75歳で亡くなりました。ほぼ生涯現役を貫いた奉行生活といえるのでしょう。

徳川家の正史である『徳川実紀(とくがわじっき)』には、忠相の死を、「(6月に)吉宗が薨(こう)じ給いし頃も、寺社奉行の立場にあり、弔いのこと、供養のことなど、一途に奉仕をした。その後自身も病に罹(かか)り、その年の冬遂に身罷(みまか)った。このような人は再び、世に現れないものだ」と記しています。

法諡「松運院殿前越州刺史(しし)従五位下興誉仁山崇義大居士」として、大岡家14代の人々とともに浄見寺の高台にある一族の墓所に静かに眠っています。なお、刺吏は「国司」や「守」を意味する唐名です。

(5)　大岡祭とは

最後は、「大岡越前祭」に触れましょう。以前は、「大岡祭」という名称でした。桜の満開のときに開催される祭なので、桜花祭(おうかさい)と勘違いされる方もいました。

大正元(1912)11月19日に即位後間もない大正天皇によって「徳川治世の明吏(優れた官僚)」として、「故従五位下　大岡忠相」に対して「従四位」が贈られました。法諡には「従五位下」とありますので、没161年後の贈位によって「準国持大名」の格に出世したといえるのです。

11月22日、墓前において「贈位奉告式」が、大岡家13代当主の子爵・大岡忠綱、弟大岡忠徳ほか大岡家一統らによって執行されました。大正初期の浄見寺および墓所の様子は、大正期の絵葉書（図1）で御想像ください。なお、明治4年(1971)の廃藩置県後の旧藩主には、公爵(徳川、島津、毛利など)、侯爵(ほぼ30万石以上の大名)、伯爵(ほぼ10万石以上の大名)、子爵(10万石以下の大名)、男爵という爵位が与えられました。1万石の大岡家には子爵が与えられています。

同2年3月9日「臨時贈位祭」を、高座郡長、藤沢署長、伊藤里之助茅ヶ崎町長、中島熊吉郎茅ヶ崎駅長、菊地小兵衛茅ヶ崎郵便局長、布川元治郎小出村長、山宮藤吉衆議院議員らが発起人となり、浄見寺の菱科顕順住職、檀徒総代らと相談して、土方伯爵、福岡伯爵、青木子爵、県の事務官らの賛助で開催しました。旧西大平藩士、地元の小学校校長・訓導諸氏ら多くの人々が参列しました。

同3年3月15日「第2回贈位例祭」を開催しました。

同4年4月15日から12年まで「例祭」の名称で開催しました。

同12年(1923)9月1日の関東大震災で浄見寺が罹災(りさい)し、大岡家の墓石も倒壊してしまい、翌13年から昭和 5 年までの間、中止を余儀なくされました。

ようやく、昭和5年(1930)10月19日に浄見寺が震災より復興しました。そのときの様子も絵葉書（図2）で見ることができます。翌6年4月15日、復興第1回大祭が開催され、12年(1937)まで継続しましたが、戦争の激化などによって中止されました。なお、昭和7年4月の第2回大祭において、翌年の第3回からは開催日を4月15日から3日に変更されることが決定されています。

戦後は、昭和22年(1947)4月に開催され、24年4月は「甘藷祭」と言う名称で行われています。食糧の増産が奨励された当時の時代背景を考えると、忠相が登用した一人である青木昆陽、甘藷先生に由来があるのでしょう。以降の開催の有無は不

明ですが、開催は非常に困難だったと思われます。

昭和 31 年(1956)4 月 7 日、郷土史家・鶴田栄太郎らの主唱で、復活第 1 回大岡祭が開催されました。単なる祭の復活というだけではなく、前年に実施された小出村の分村による茅ヶ崎市との合併に伴う住民間の融和を図る目的もあったことと思われます。

振り返ると、大正の大震災や昭和の戦争によって 2 度の中止を余儀なくされましたが、その都度復興・復活して、名称を変えながらも多くの市民の支持を得て今日まで継続されて来ました。平成に入って名称の検討が重ねられました。平成 6 年(1994)の第 39 回からは「大岡越前祭」と変更され、令和 2 年(2020)4 月には第 65 回目が開催されます。とくに、大名行列は祭の中心の一つとして市民の多くが楽しみにしているイベントといえるものです。

あるコラムニストのエッセイに「昔は、古典や物語の中の人物は、生きて町中を歩いていた」とありますが、大岡越前祭の当日、大岡忠相は正に小出と茅ヶ崎を結ぶ人物として市民の前に登場しているのです。

参考文献(抄)

大口勇次郎『茅ヶ崎市史ブックレット 12、ちがさきと大岡越前守』
大口勇次郎「ちがさきと大岡越前守」『ヒストリアちがさき』9
大口勇次郎「大岡忠相と田沼意次ー江戸時代の領主たちー」『寒川町史研究』19
大口勇次郎「寒川の領主たちー大岡、田沼と杉浦正職」『郷土さむかわ』17
井上　攻「大口勇次郎著『ちがさきと大岡越前守』を読んで」『ヒストリアちがさき』3
神崎彰利『茅ヶ崎市史ブックレット 15、ちがさきの村とお殿さま』
神崎彰利「茅ヶ崎地域における近世の領主たち 1〜3」『茅ヶ崎市史研究』9〜11
山口金次「茅ヶ崎市内に現存する大名・旗本墓碑一覧」『茅ヶ崎市史研究』創刊号
東　哲郎「大岡祭はじまる」『図説市民の半世紀、茅ヶ崎市史・現代』8
『茅ヶ崎市史』1、4、5
『写真集　茅ヶ崎きのうきょう』
『茅ヶ崎市史史料集 3、茅ヶ崎地誌集成』　新編相模国風土記稿、皇国地誌ほか
『神奈川県高座郡小出村勢一覧表』(昭和 3 年版)　大岡陣屋跡、窓月山浄見寺
『新訂寛政重修諸家譜』16、「藤原氏支流大岡」
鶴田栄太郎『あしかび叢書 1 大岡越前守墓と浄見寺』
広瀬正治・塩川健寿・藁品実・大岡越前守奉賛会編『大岡越前守遺跡写真集成』
大岡越前祭実行委員会『大岡越前祭 50 回記念誌』
樋田豊宏『小出誌』　大岡忠勝の吉田城攻めほか
穂積陳重「板倉の茶臼、大岡の鐫」『法窓夜話』　大岡忠相の墓（大正 4 年 11 月 4 日）
山本夏彦『日常茶飯事』
平山孝通・坂井源一「「絵葉書」にみる大岡越前守と菩提所浄見寺」『文化資料館調査研究報告』27

*1　茅ヶ崎ゆかりの人物館学芸員

(謝辞)　浄見寺、吉沢英明氏、樋田豊宏氏、須藤格氏、三谷恭子氏、岩城奈都子氏、古郡昌宏氏、塘瑞希氏はじめ、社会教育課、文化資料館、市史編さん担当、ゆかりの人物館などの諸機関のご協力に、感謝いたします。

なお、令和 2 年正月 6 日に急逝された坂井源一氏にはながきに渡り多くのご協力を頂きました。心よりのご冥福をお祈りいたします。合掌

(追記)　令和 2 年春、大岡家一族墓所に大岡奉賛会によって「大岡家と浄見寺」の解説板が立てられました。

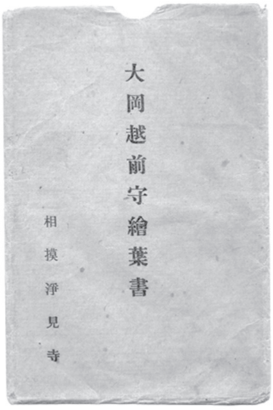


図１−１　大岡越前守絵葉書（大正初年）

図１−２　大岡家累代ノ墓（其一）

図１−３　大岡家菩提所（其二）（本堂ト庫裏）

図１−４　大岡家累代ノ墓（其三）

図１−５　陣屋跡ヨリ海岸ヲ望ム

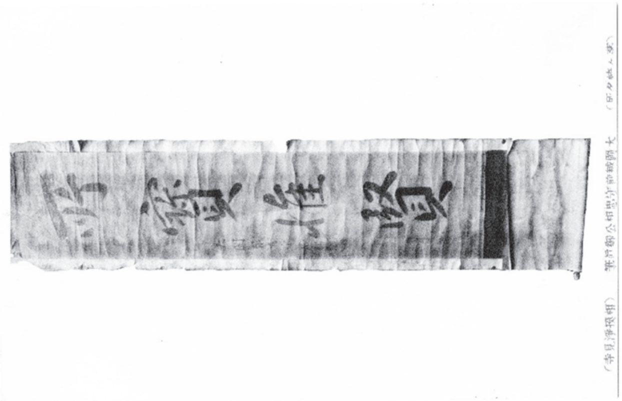


図１−６　大岡越前守忠相公御真筆

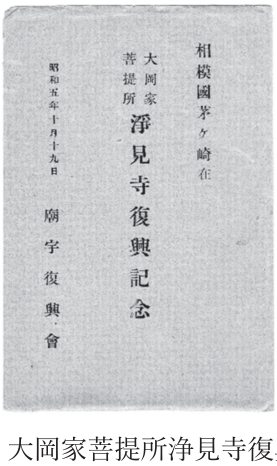


図２−１　大岡家菩提所浄見寺復興記念
（昭和５年10月19日）

図２−２　大岡家菩提所浄見寺本堂

図２－３　大岡越前守忠相公墓

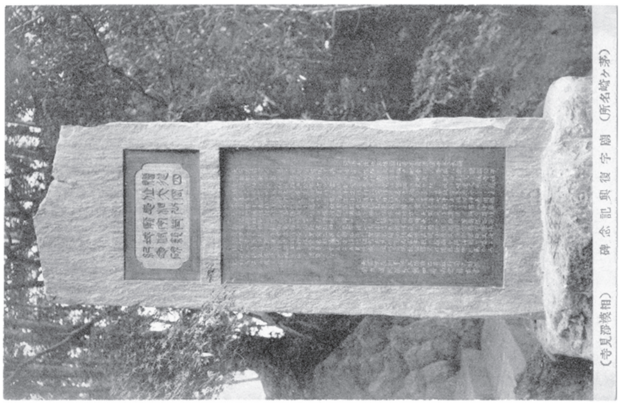


図２－４　廟宇復興記念碑

図２－５　大岡陣屋敷跡ヨリ富岳ヲ望ム

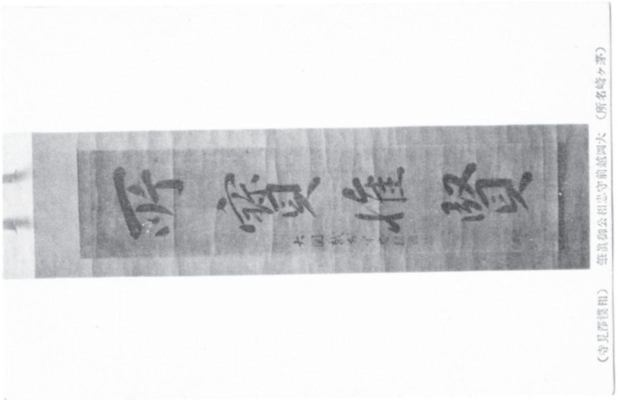
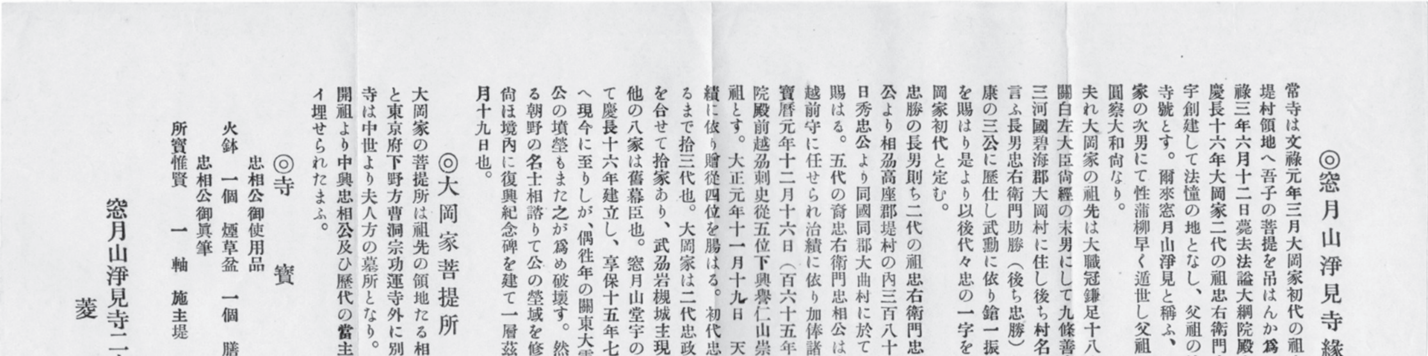


図２－６　大岡越前守忠相公御真筆



◎窓月山淨見寺緣起

常寺は文祿元年三月大岡家初代の祖忠右衛門忠勝公相劦高座郡堤村領地へ吾子の菩提を弔はんか爲め庵を結びて淨見と號し文祿三年六月十二日薨去法謚大綱院殿忠譽窓月淨見大居士と稱す慶長十六年大岡家二代の祖忠右衛門忠政父祖の爲め庵を改め堂宇創建して法憧の地となし、父祖の法號窓月淨見を以て直ちに寺號とす。爾來窓月山淨見と稱ふ、又該寺開闢の住職は柴田勝家の次男にて性蒲柳早く遁世し父祖の冥福を祈る即ち深譽上人圓察大和尚なり。

夫れ大岡家の祖先は大職冠鎌足十八代九條太政大臣兼實十五代關白左大臣尙經の末男にして九條善吉と言へるあり、故ありて三河國碧海郡大岡村に住し後ち村名を以て氏となし大岡善吉と言ふ長男忠右衛門助勝（後ち忠勝）初めて徳川清康、廣忠、家康の三公に歴仕し武勳に依り鎗一振及ひ廣忠公の諱名忠の一字を賜はり是より以後代々忠の一字を用ふ、而して忠勝を以て大岡家初代と定む。

忠勝の長男則ち二代の祖忠右衛門忠政天正十九年五月三日家康公より相劦高座郡堤村の内三百八十石及ひ寛永二年十二月十二日秀忠公より同國同郡大曲村に於て二百二十石を武勳に依りて賜はる。五代の裔忠右衛門忠相公は享保年間江戸町奉行となり越前守に任せられ治績に依り加俸諸侯の列に斑す。寶暦元年十二月十六日（百六十五年前）薨去せらる。法謚松運院殿前越劦刺史従五位下興譽仁山崇義大居士と號し宗家中興の祖とす。大正元年十一月十九日　天皇陛下より江戸町奉行の功績に依り贈従四位を賜はる。初代忠勝公より現子爵忠綱公に至るまで拾三代也。大岡家は二代忠政公の時より分家を生じ宗家を合せて拾家あり、武劦岩槻城主現子爵忠量公は其の一にして他の八家は舊幕臣也。窓月山堂宇の創始は二代忠政公の發願にて慶長十六年建立し、享保十五年七世單譽上人時代に改築を加へ現今に至りしが、偶往年の關東大震災に遭遇して堂宇倒潰し、公の墳塋もまた之が爲め破壊す。然る所公の德風清節を欽慕する朝野の名士相諮りて公の塋域を修築すると共に殿堂を再建し尙ほ境内に復興紀念碑を建て一層茲に美觀を呈す時昭和五年十月十九日也。

◎大岡家菩提所

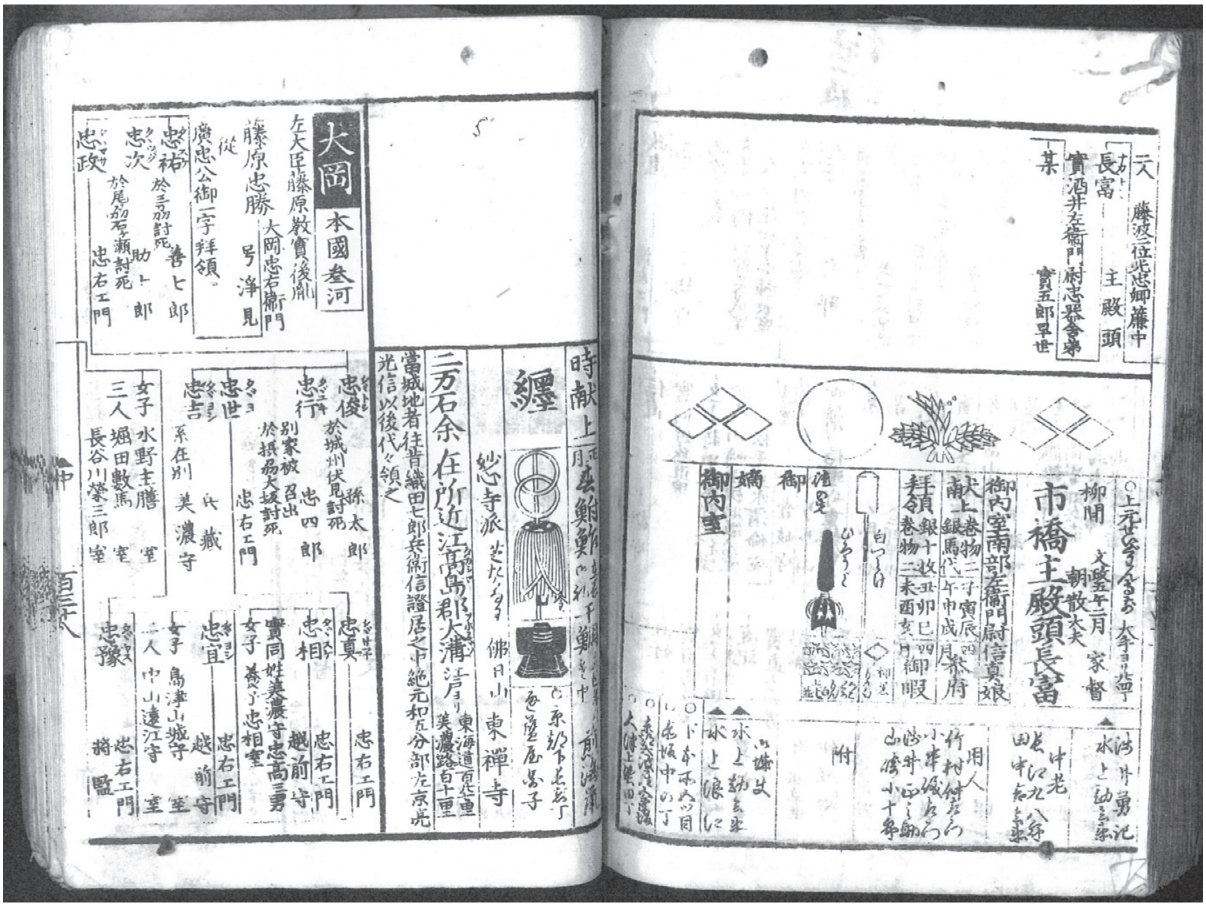
大岡家の菩提所は祖先の領地たる相劦茅ヶ崎在堤淨土宗淨見寺と東京府下野方曹洞宗功運寺外に別家の菩提所七箇寺あり功運寺は中世より夫人方の墓所となり。淨見寺は殿方の墓所にして開祖より中興忠相公及ひ歴代の當主は窓月山頭大樹のもとにエイ埋せられたまふ。

◎寺　寶

忠相公御使用品
火鉢　一個　煙草盆　一個　膳具二膳
忠相公御眞筆
所寶惟賢　一　軸　施主堤　石井文四郎

窓月山淨見寺二十三世
菱　科　顯　順　識

図２－７　窓月山浄見寺縁起



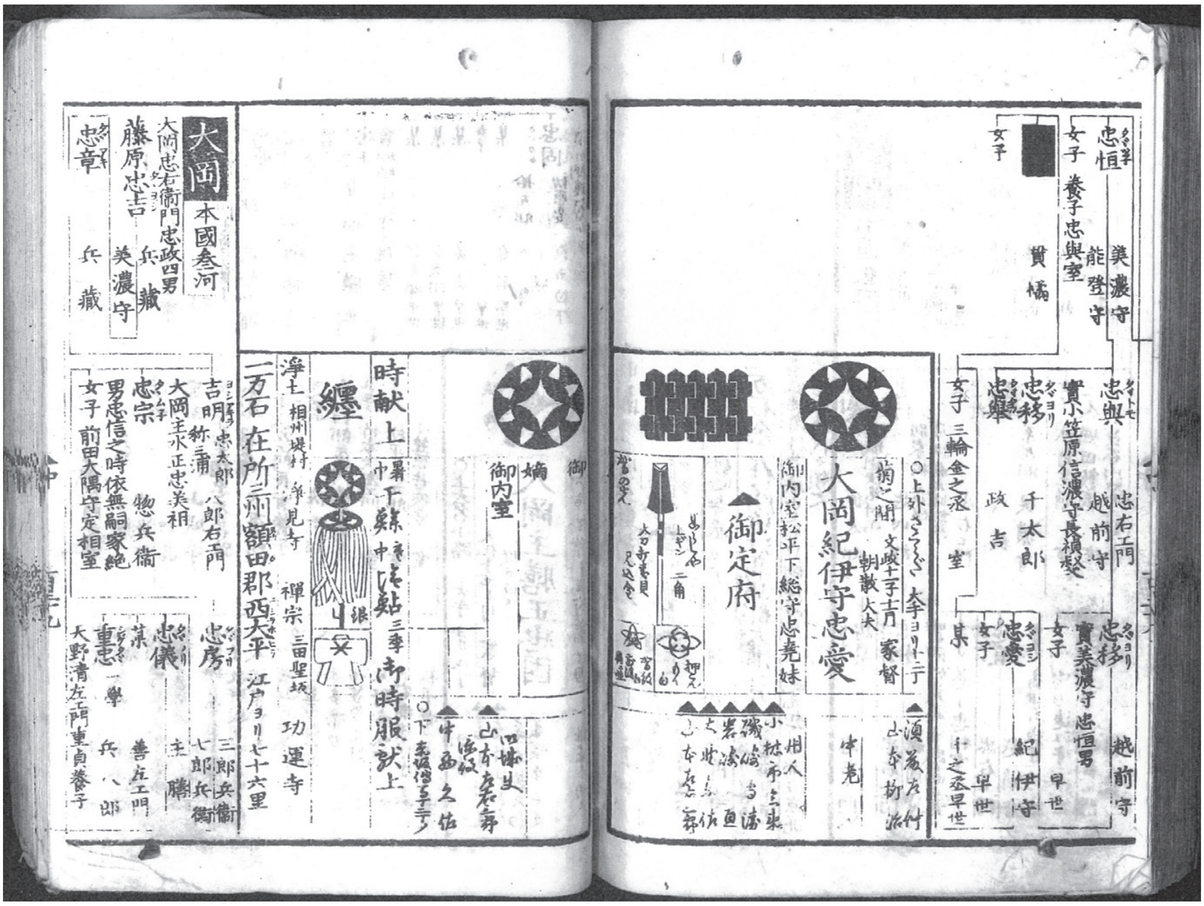


図３　大名武鑑

新編相模國風土記稿卷之六十一　村里部　高座郡卷之三

號す、古義眞言宗茅崎村圓藏寺末 本尊藥師、中興眞惠寛文十三年十月十七日卒 △觀音堂 十一面觀音を置、
○堤村豆々三牟良 江戸より十四里、東西二十七町南北七町東、遠藤村、大庭村、西、下寺尾村、南、赤羽根村、甘沼村、北、芹澤・行谷二村 戸數七十四、小田原北條氏割據の頃は豆州大見の士三人知行す【役帳】に大見衆三人三十貫文、東郡堤と載す 今地頭は大岡傳藏先祖忠右衛門忠政天正十九年五月三日賜る、
○高札場一 ○小名 △上谷加美夜豆 △中谷奈加夜豆 △天神谷天牟志牟夜豆 △權兵衛谷古牟倍惠夜豆 △一本松此所に老松在樹圍二丈餘、
○鍛冶坂 坤にあり、○諏訪社 鎭守とす、例祭七月廿七日香川村普賢寺持、△大鐘 天明三年鑄造、○天神社 正覺院持、
○正覺院 堤源山と號す、曹洞宗下寺尾村白峯寺末 本尊釋迦、開山快翁正德二年正月廿八日卒 △八幡社 末社稻荷あり、△大日堂
○淨見寺 窻月山と號す、淨土宗鎌倉郡岩瀨村大長寺末 慶長十六年地頭大岡忠右衛門忠世忠右衛門忠政の三男なり、法號源忠院德譽法運、寛永十七年十二月廿八日死す、父兄追福の爲に起立し、芹澤村來迎寺五世深譽を招て開山とす深譽は三州人、明曆二年六月十九日寂す 寺山號は祖父忠右衛門忠勝が法名の文字なり、今大岡氏一統の菩提所たり本尊阿彌陀を安ず、△大岡忠右衛門忠勝墓 碑面に大綱院忠譽窻月淨見居士、文祿三年六月十二日と鐫る、忠勝初三州某地に葬り、元和元年七月此處に改葬すと云ふ寛永大岡譜に忠勝は傳藏善吉が子なり、始め助右衛門助勝と稱す、淸康君廣忠卿に歷任し、三州吉田の城攻に城將牧野傳次を討取る、此賞として下坂長身の御鎗を賜ふ、廣忠卿より諱の一字を賜はり、忠勝と改む、某年三河國にて七十三歲にして死すと見ゆ、 ○妙傳寺 歡照山と號す、法華宗身延久遠寺末 本尊宗派の諸尊及び日蓮を安ず、開山を日安元和九年九月朔日寂すと云ふ、△鐘樓 正德三年の鑄鐘をかく、○阿彌陀堂淨見寺持、
○大岡氏陣屋蹟 淨見寺の東南にあり、忠右衛門忠政當村を賜りし後こゝに土著し、後江戸に移住す、
○香川村加々波牟良 江戸より十四里、戸數五十五、北條氏割據の頃は吉田又三郎知行す【役帳】に、吉田又三郎十貫九百七十三文、東郡香川と載す、今本間熊太郎知行所なり、廣凡十町袤七町程東、甘沼村、西、大曲村、南、西久保村、北、寺尾村、大山道南境にあり、
○高札場一
○小出川 西界を流る、小橋二を架す大曲橋間門橋の名あり、

図４　新編相模国風土記稿（『茅ヶ崎市史史料集　第三集』より）

図５　大岡忠相は、髭を抜き精神を集中させて裁判にのぞんだという（吉沢英明氏提供）

図６　浄見寺

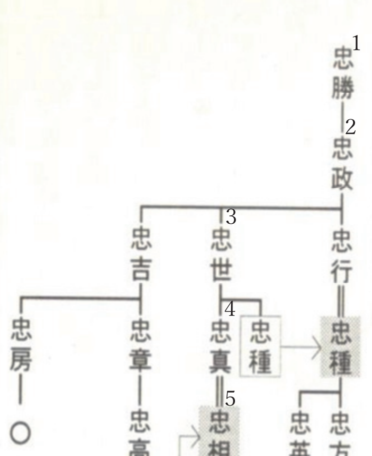


図７　大岡家略系図